



SEONG-JIN CHO

Piano Recital

チョ・ソンジン ピアノ・リサイタル

2022年8月25日(木) 19:00開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m. Thursday, August 25, 2022 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

後援：駐日韓国大使館 韓国文化院

協力：ユニバーサル ミュージック

スタインウェイ・ジャパン



文化庁

文化庁 子供文化芸術活動支援事業

©Christoph Köstlin / DG

ヘンデル：クラヴサン(チェンバロ)組曲 第1集から 第2番 ヘ長調 HWV427

G. F. Händel: Harpsichord Suite Set 1, No.2 in F Major, HWV 427

- | | |
|-------------|-------------------|
| 1. アダージョ | 1. Adagio |
| 2. アレグロ | 2. Allegro |
| 3. アダージョ | 3. Adagio |
| 4. フーガ：アレグロ | 4. Fugue: Allegro |

ヘンデル：クラヴサン(チェンバロ)組曲 第1集から 第8番 ヘ短調 HWV433

G. F. Händel: Harpsichord Suite Set 1, No.8 in F Minor, HWV 433

- | | |
|-------------|-------------------|
| 1. プレリュード | 1. Prelude |
| 2. フーガ：アレグロ | 2. Fugue: Allegro |
| 3. アルマンド | 3. Allemande |
| 4. クーラント | 4. Courante |
| 5. ジーグ | 5. Gigue |

ブラームス：ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ 変ロ長調 Op.24

J. Brahms: Variations and Fugue on a Theme by Händel in B-Flat Major, Op.24

* * *

シューマン：3つの幻想小曲集 Op.111

R. Schumann: Three Fantasy Pieces Op.111

- | | |
|----------|-----------------------|
| 第1曲 ハ短調 | No. 1 in C Minor |
| 第2曲 変イ長調 | No. 2 in A-Flat Major |
| 第3曲 ハ短調 | No. 3 in C Minor |

シューマン：交響的練習曲 Op.13

R. Schumann: Symphonic Etudes Op.13

主題／練習曲I／練習曲II／練習曲III／練習曲IV／練習曲V／練習曲VI／
練習曲VII／練習曲VIII／練習曲IX／練習曲X／練習曲XI／練習曲XIIThema / Étude I / Étude II / Étude III / Étude IV / Étude V / Étude VI /
Étude VII / Étude VIII / Étude IX / Étude X / Étude XI / Étude XII

2022年 日本公演スケジュール

8月23日(火) 名古屋 愛知県芸術劇場コンサートホール <主催> CBCテレビ

8月25日(木) 東京 東京オペラシティ コンサートホール <主催> ジャパン・アーツ

8月27日(土) 横須賀 よこすか芸術劇場 <主催> 公益財団法人横須賀芸術文化財団

チョ・ソンジン (ピアノ)

Seong-Jin Cho, Piano

圧倒的な才能と生来の音楽性を持つチョ・ソンジンは、同世代の最も優れたピアニストの一人として、また現在の音楽界における最も異彩を放つアーティストとして名を成している。思慮深く詩的で、堂々としながらもやさしく、また極めてヴァルトゥオーソ的で色彩豊かなソンジンの演奏は、貫禄と純粋さを兼ね備える、自然なバランス感覚によって生み出されている。

1994年ソウル生まれ。6歳でピアノを習い始め、11歳で初めて観客の前でリサイタルを行う。2009年第7回浜松国際ピアノコンクールで最年少優勝。2011年には17歳でチャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。2012～2015年にパリ音楽院でミシェル・ペロフに学ぶ。

2015年ショパン国際ピアノコンクールで優勝し、国際的な脚光を浴びる。2016年1月にドイツ・グラモフォンと専属契約を締結。その後、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロンドン響、パリ管、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管等、世界中の一流オーケストラと共演している。指揮者ではチョン・ミョンフン、グスターボ・ドゥダメル、ヤニック・ネゼ＝セガン、アンドリス・ネルソンス、ジャンドレア・ノセダ、サイモン・ラトル、サントゥ＝マティアス・ロウヴァリ、エサ＝ベッカ・サロネン等と定期的に共演している。

2022/23シーズンには、フェストシュピールハウス・バーデンバーデンにおいてネゼ＝セガン指揮ヨーロッパ室内管とブラームスのピアノ協奏曲2曲を演奏する。またメータ指揮バイエルン放送響、ネルソンス指揮ボストン響と再共演するほか、ピシュコフ指揮チェコ・フィルとはティエリー・エスケシュの新しいピアノ協奏曲を世界初演する。そのほかラトル指揮ロンドン響との日本・韓国ツアー、チョン・ミョンフン指揮ドレスデン・シュターツカペレとのドレスデン及び韓国公演、そしてアカデミー室内管とのドイツ・ツアーを予定。

これまで、カーネギー・ホール、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ベルリン・フィルハーモニー、ウィーン・コンツェルトハウス、ミュンヘンのプリンツレーゲンテン劇場、東京のサントリーホール、ロサンゼルス・ウォルト・ディズニー・コンサートホール、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ・フェスティバル、ヴェルビエ音楽祭等、世界の権威あるホールや音楽祭でリサイタルを行っている。

来シーズンにはカーネギー・ホール、ボストン・セレブリティ・シリーズ、ウォルト・ディズニー・ホール、フランクフルトのアルテ・オーパー、シュツットガルトのリーダーハレ、ハンブルクのライスハレ、ベルリン・フィルハーモニー、ウィーンの楽友協会等でソロ・リサイタルを予定。ロンドンのバービカンではデビュー・リサイタルとなる。このシーズンでは3度日本を訪れることになっており、最初の2022年8月には名古屋、東京、横須賀でリサイタルを行う。

2016年11月、ノセダ指揮ロンドン響と、ショパンのピアノ協奏曲第1番と4つのバラードを収録したドイツ・グラモフォンによる初のCDをリリース。2017年11月にドビュッシーのソロ・アルバム、2018年にネゼ＝セガン指揮ヨーロッパ室内管とのモーツァルト・アルバム、2020年5月にシューベルトの幻想曲「さすらい人」、ベルクのピアノ・ソナタOp.1、リストのピアノ・ソナタ短調を収録したアルバムをリリース。2021年8月には、ノセダ指揮ロンドン響との共演によるショパンのピアノ協奏曲第2番とスケルツォ集がリリースされた。これまでにリリースした録音はすべて、世界中で批評家から絶賛されている。



© Christoph Köstlin / DG



Seong-Jin Cho, Piano

조성진 피아니스트



G. F. ヘンデル

クラヴサン(チェンバロ)組曲 第1集から 第2番 ヘ長調 HWV427

J.S.バッハと並ぶバロック時代の大作曲家、ジョージ・フレデリック・ヘンデル(1685～1759)は、「メサイア」をはじめとするオラトリオや、オペラの分野で、新しい境地を開拓するなど、その作品の中心を成すのは劇場用の音楽だった。一方、彼は鍵盤楽器の名手としても知られ、貴族の子女たちに教えていたという。ヘンデルの残した鍵盤作品のなかに、2集から成る「クラヴサン(チェンバロ)組曲」がある。主に教育用に使われたと考えられる、親しみやすい曲集である。

1720年にロンドンで出版された第1集(全8曲)のなかの第2番は、ヘ長調で書かれ、次の4曲から成る。当時の組曲としては例外的に、舞曲が含まれず、教会ソナタ風の構成でまとめられており、終曲のアレグロは、3声のフーガとなっている。

第1曲: アダージョ / 第2曲: アレグロ / 第3曲: アダージョ / 第4曲: アレグロ(フーガとの表記もあり)。

クラヴサン(チェンバロ)組曲 第1集から 第8番 ヘ短調 HWV433

5曲から成るこのヘ短調の組曲では、第2曲がフーガのスタイルで書かれているのをはじめ、各曲において模倣の書法が目立つ点が、特色となっている。

第1曲: プレリユード / 第2曲: フーガ(アレグロとの表記もあり) / 第3曲: アルマンド / 第4曲: クーラント / 第5曲: ジーグ。

J. ブラームス

ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ 変ロ長調 Op.24

ドイツ・ロマン派の作曲家、ヨハネス・ブラームス(1833～1897)は、変奏曲の分野に大きな功績を残した人物でもある。1861年に作曲された「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」は、主題と25の変奏、そしてフーガから成り、全体としては、ロマンティックな味わいよりも古典的で堂々とした風格を印象づける作品。主題は、ヘンデルの「クラヴサン(チェンバロ)組曲第2集」の第1番(変ロ長調、HWV434)に含まれる「エア(変奏つき)」から取られ、ブラームスの書いた主題は、細部までヘンデルの原曲に忠実である。続く25の変奏には、多彩な変奏技法が現れるが、底流としてある見事な統一感によって、まとまりが保たれている。同じ主題に基づいたフーガは、自由な構成により、反行や拡大などの技法も駆使されている。そして、オルガンの足鍵盤の響きを想起させる、オクターヴによるバスの主題を伴って、壮大なクライマックスが築かれる。

R. シューマン

3つの幻想小曲集 Op.111

ドイツ・ロマン派の作曲家ローベルト・シューマン(1810～1856)は、特に20歳代の間はピアノ曲の創作に集中的に取り組み、1830年代の10年間に約30曲のピアノ曲を書きあげた。1851年に

作曲された「3つの幻想小曲集」は、シューマンの数少ない1850年代のピアノ曲であり、1830年代の作品と比べると書法が簡潔で、旋律線がより明確になっている。そして、曲どうしの調関係が緊密な、次の3曲から成る。

第1曲: きわめて速く、情熱的な演奏で。ハ短調。3連符の連続や、半音階的な書法を特色としたこの曲は、楽想表示のとおり、まさに情熱的な気分を表現している。

第2曲: かなりゆっくりと。変イ長調。牧歌的な旋律が静かに歌われるが、中間部はテンポを速めてハ短調で現れ、第1曲に似た書法で情熱の高まりを見せる。

第3曲: 力強く、きわめてはっきりと。ハ短調。行進曲風だが、中間部では、穏やかな雰囲気の中で転調が繰り返される。

交響的練習曲 Op.13

1834年から1837年にかけて作曲された「交響的練習曲」は、シューマンのピアノ曲のなかでも特に演奏効果の高い1曲である。この標題は、1837年の初版(イギリスの作曲家兼ピアニストのベネットに献呈)に付いていたものだが、以前は、「12のダヴィッド同盟練習曲」および「フロレスタンとオイゼビウスによる管弦楽的性格の練習曲」という標題も考えられていた。ダヴィッド同盟とは、シューマンが評論を書いたなかに用いた架空のグループであり、彼は、情熱的で外向的なフロレスタンと、温厚で内向的なオイゼビウスという、互いに対照的な性格を持つ人物を、自身のペンネームとして使い分けていたのである。一方、シューマンは1852年に、初版の一部の曲を削除し、主に終曲に改訂を加えた第2版を発表した。また、彼がこの曲のために書いておきながら発表しなかった5つの変奏が、ブラームスの監修によって1893年に遺作として追加出版された。

シューマンの考えた数種の標題からも明らかのように、この曲は、オーケストラのようなシンフォニックな響きを要求するほか、練習曲として技巧的に充実し、さらに、変奏曲形式で書かれていることから変奏曲としての豊かな表現性も合わせ持つ作品であり、「主題」と12の「練習曲」から成る。今日では一般的に、構成は初版に従い、細かな改訂部分は第2版に従ったエディションが用いられている。追加出版された遺作の5つの変奏を含めるかどうかは、演奏者の自由に任せられているが、今回チョ・ソンジンは、その扱いをまだ決めかねているらしく、公演当日のお楽しみとなりそうだ。

まず、「主題」と12の「練習曲」の部分、いわば本体の内訳は、次の通りである。主題(アンダンテ、嬰ハ短調) / 練習曲I(ウン・ボコ・ビウ・ヴィーヴォ) / 練習曲II / 練習曲III(ヴィヴァーチェ) / 練習曲IV / 練習曲V / 練習曲VI(アジタート) / 練習曲VII(アレグロ・モルト、ホ長調) / 練習曲VIII(再び嬰ハ短調) / 練習曲IX(プレスト・ボツシービレ) / 練習曲X / 練習曲XI(嬰ト短調、第2版ではコン・エスプレッショーネ) / 練習曲XII(終曲: アレグロ・プリランテ、変ニ長調)。

そして、以上の間の任意の箇所に、遺作の5つの「変奏」の全部または一部が、挿入して演奏される可能性がある。その5曲の内訳は次の通りである。遺作: 変奏I(嬰ハ短調、以下、IVまで同じ) / 遺作: 変奏II / 遺作: 変奏III / 遺作: 変奏IV / 遺作: 変奏V(変ニ長調)。